

積分方程式を用いた圧密の数値解析

川崎重工業 正会員○梅田 聰
 京都大学工学部 正会員 小林昭一
 京都大学工学部 正会員 西村直志

1. 序

本研究では、積分方程式による Biot の圧密理論の数値解析法を定式化する。さらに、この方法に基づく数値解析例として 2 次元等方弾性体の場合の例を示し、積分方程式法の有効性について述べる。

2. 定式化

Biot の圧密理論の式は次のとおりである。

$$\Delta^* u - \nabla p = -f, \quad \nabla \cdot u - k \Delta p = g \quad \text{in } D \quad (1.(a)(b))$$

$$\text{ただし, } \Delta^* u = \operatorname{div} C[\nabla u] \quad \text{特に等方弾性体では, } \Delta^* u = \mu \Delta u + (\lambda + \mu) \nabla \operatorname{div} u \\ g = -p_f k \nabla F$$

ここに、 D は滑らかな境界 ∂D をもつ領域、 u は変位、 p は水圧、 f は物体力、 p_f は水の密度、 k は透水係数、 \cdot は時間微分、 C は弾性常数、また、 λ, μ は Lamé 常数である。

次に、初期条件、境界条件を示す。

$$\nabla \cdot u|_{t=0} = \theta \quad \text{in } D \quad (2.)$$

$$u = u_0 \quad \text{on } \partial D_u$$

$$S(\text{表面力}) = S_0 \quad \text{on } \partial D_s$$

$$p = p_0 \quad \text{on } \partial D_p$$

$$r = -k \frac{\partial p}{\partial n} = r_0 \quad \text{on } \partial D_r$$

$$\begin{cases} \overline{\partial D_u \cup \partial D_s} = \partial D \\ \overline{\partial D_u \cap \partial D_s} = \phi \end{cases}$$

$$\begin{cases} \overline{\partial D_p \cup \partial D_r} = \partial D \\ \overline{\partial D_p \cap \partial D_r} = \phi \end{cases}$$

なお、 $\theta, u_0, S_0, p_0, r_0$ は与えられた関数である。

これらを満たす u, p を求めるために、(1) 式の基本解を用いれば、 u, p は次のようになる。

$$u = \tilde{u}, \quad p = \tilde{p} \quad \text{in } D$$

$$u = 0, \quad p = 0 \quad \text{out of } D \quad (4.(a)(b))$$

ここでは、 \tilde{u} についてのみ表示する。なお、2 次元等方弾性体について考える。

$$\begin{aligned} \tilde{u}(x,t) &= \int_{\partial D} u_0(x-y) S(y,t) - \int_{\partial D} S_0(x-y) u(y,t) + \int_D u_0(x-y) f(y,t) \\ &\quad + \int_{\partial D} \int_0^t \dot{U}(x-y, t-s) S(y, s) - \int_{\partial D} \int_0^t \dot{S}(x-y, t-s) u(y, s) - \int_{\partial D} \int_0^t P(x-y, t-s) r(y, s) \\ &\quad + \int_{\partial D} \int_0^t R(x-y, t-s) P(y, s) + \int_D \int_0^t \dot{U}(x-y, t-s) f(y, s) \\ &\quad + \int_D \int_0^t P(x-y, t-s) g(y, s) + \int_D P(x-y, t) \theta(y) \quad (ds, ds, dv \text{ は省略した。}) \end{aligned} \quad (5.)$$

$$\begin{aligned}
 \text{ただし, } U_0(x-y) &= -\frac{1}{4\pi\mu} (1 \log R - \nabla R \otimes \nabla R), \quad S_0(x,y) = \frac{1}{\pi R} \frac{\partial R}{\partial n_y} \nabla R \otimes \nabla R \\
 \dot{U}(x-y,t) &= \frac{g}{\pi} \left[1 \left(\frac{1-\exp}{2R^2} \right) - \nabla R \otimes \nabla R \left(\frac{1-\exp}{R^2} - \frac{\exp}{4C_v t} \right) \right] \\
 \dot{S}(x,y,t) &= -\frac{2\mu k}{\pi R} \left\{ \left[(1-4\nabla R \otimes \nabla R) \frac{\partial R}{\partial n_y} + n_y \otimes \nabla R + \nabla R \otimes n_y \right] \right. \\
 &\quad \cdot \left. \left(\frac{\exp}{4C_v t} - \frac{1-\exp}{R^2} \right) + (\nabla R \otimes n_y - \nabla R \otimes \nabla R) \frac{\partial R}{\partial n_y} \frac{k^2 \exp}{8C_v^2 t^2} \right\} \\
 P(x-y,t) &= \frac{1-\exp}{2\pi R} \nabla R, \quad R(x,y,t) = -\frac{g}{\pi} \frac{\partial}{\partial n_y} \left[\left(\frac{1-\exp}{2R} \right) \nabla R \right]
 \end{aligned}$$

なお, $C_v = \frac{g}{k}(\lambda+2\mu)$, $R = |x-y|$, $\exp = e^{-R^2/4C_v t}$

ここで点 x を境界 ∂D に極限移行し, 境界条件を用いると境界積分方程式が得られる。この式を離散化すると数値解析が可能となる。

3. 数値解析

2. で述べた数値解析法に基づく例を以下で示す。なお、初期条件は $\theta = 0$ (瞬間載荷) $\partial D = \partial D_s = \partial D_p$ とし、境界条件として $P = 0$ とした。また、境界要素としては線形アイソパラメトリック要素を用いた。時間方向の変化は線形とし、時間積分は解析的に行い、領域積分は Gauss 積分を用い、特異積分については剛体変位を用いて評価した。時間増分 Δt は、 $\Delta t C_v/a^2 = 1/100$ or $1/10$ として固定した。なお、 a は半径である。さらに、境界の分割数は32点等分割とした。

3. 1 円板

半径 a の円板が境界条件 $S = -P_0 n$ (P_0 : 定数, n : 単位法線ベクトル) の場合の表面変位を解析値と比較した (Fig.1)。なお、 $\Delta t C_v/a^2 = 1/100$ とし、ボアソン比が 0 , $1/3$ の2通りについて行った。

3. 2 2軸応力を受ける円孔

外部問題として、遠方で $\tau_{11} = -0.4P_0$, $\tau_{22} = -0.8P_0$ であり、 ∂D 上で $S = 0$ を満たす半径 a の円孔の解析する。 $\Delta t C_v/a^2 = 1/100$ として、 $0 < \Delta t C_v/a^2 < 1$ の間を解析し、 $\Delta t C_v/a^2 = 1/10$ として、 $0 < \Delta t C_v/a^2 < 10$ の間の計算を行い、両者をプロットした (Fig.2)。また、Fig.3 は円孔の変形形状を表し、偏平度の小さいものから順に $\Delta t C_v/a^2 = 0, 0.01, 0.1, 0.5, 2.0, 10, \infty$ での変形である。

その他の結果は当日発表する。

参考文献

西村、小林 第17回土質工学会研究発表会論文集

P153, 1982

小林、西村 第18回土質工学会研究発表会論文集

P229, 1983

